
全人類は、これを読め！

シー様（水嶋ヒロ + 齋藤智裕） = 十字軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全人類は、これを読め！

【コード】

N5003P

【作者名】

シー様（水嶋ヒロ＋齋藤智裕） 〓 十字軍

【あらすじ】

精神障害者になっていく過程と苦悩を書く

認識のズレ（前書き）

映像シナリオを意識して書きました。

主人公である女性の顔はあえて描写しないものとします。

精神障害者は見た目では判断できないからこそ、描写するのは適当ではないと思うからです。

精神障害者を物語として主役にするならば、精神障害を代表するキヤラとして、個人を形作って不用意に先入観を抱く様な演出は極力避けたいです。

そうでなければ『精神障害者達』への偏見は無くならないと思いません。

そして主人公が生まれた環境や親についても極力書きません。

その様な情報に振り回されて先入観を抱くなら、良くも悪くも余計な影響を与えかねない。

大切なのは、どうしたら精神障害者を生み出さないかであり、あるいは彼らに心的ダメージを与えないかであり、家族の個人情報や環境は関係ないものとする。

ですがそれはあくまで映像化された後の設定です。

現時点では実話のモデルの元となった人物を紹介します。それを知ると、この先の文章が理解しやすくなるかもしれません。

<http://mypage.syosetu.com/84461/>

<http://fblog.jp/miyabi/archives/2010-05?p=6>

認識のズレ

小学1年の彼女は虐めを受けていた。「デブ、ブス」と罵られていた。

先生に訴えたものの、影で罵られる。

それを訴えてもまた、罵られる

何度も繰り返し返すと、先生は、疲れてしまい、ため息を漏らし、「判ったから」と彼女に言うだけで注意をしなくなった。

彼女は周囲に必要とされない状況で孤立して、学校を休みたいと言う。

「ママ、休みたい」

「一体どうしたの？ 熱でもあるの？」

母は手で熱を測る。

「熱は無いみたいね」

彼女は恥ずかしそうに申し訳なさそうに答える（字幕）で口をモゴモゴ

「デブでブスって言われて虐められるの」

母親は、聞き取れず「ん？」というリアクションのみ
しばし、沈黙の後、

「ずる休みがしたいの？ うん？ ズルは、駄目よ。ちゃんと学校行きなさい。」

「はい・・・」

彼女、しぶしぶ行く

学校に行く、孤立を繰り返し、数日後・・・

ある朝にて

「どうしたの？時間よ、遅刻するわよ

しぶしぶいく

ある朝にて

「いつまで寝ているの？早くしなさい！

しぶしぶいく

ある朝にて

「どうしたの？ かせ？ 嘘、熱なんてないじゃない、もう、早く行きなさい

しぶしぶいく

ある日、彼女はパパに言う

「今日、学校休んじゃだめかな？

パパ「どうかしたのか、

もしもじする彼女

パパ「ん？もしかしてズル休みか？」

彼女は頷く。

「駄目だ。そういう甘えた理由では休ませる訳にはいかない」

< パパとママは彼女の見えないところで会話する >

パパ「どうして、あの子は甘えた事を言っただ。お前の教育がなつとらん」

ママ「……………」

パパ「とにかく一度でも休ませたら駄目だからな。休み癖が身に付いてしまったら適わん。

ママ「そうですね……………」

パパ「どうして弱音を吐こうなんて考えるのか、やっぱり女の子だからって、甘やかして優しくしたらイカンナ。今度から少し厳しくしよう。ママもそうしてくれ」

認識のズレ（後書き）

人は負い目や申し訳なさを思うとき、声小さくなる。

自信が無いときもそう。

この話の様に勘違いされて親に判断される可能性がある。

子供の高い周波数の声は大人に聞こえないという現象もあるから注意が必要だ。

トラウマが被害妄想か・・・(前書き)

投稿する物語の順序間違えた。

けど、投稿する前にポツクリ死んだら、誰にも読まれず無念なので、あえてこのまま投稿する。

設定は1話から20年後

トラウマが被害妄想か・・・

彼女はパソコンでタイピングをしてる。

心の中の闇の彼女Aもしている。

そこにBが現れる。

「何をしているの？」

A「小説書いているの。」

B「なぜまた急に？」

A「書くのって楽しいの。物語に登場する役者さん達に感情を移して演技させるの。まるで、私が世の中の主役になっているみたいなの。」

B「どれどれ見せて、

A「あい

B「おーすごいじゃない。試しにプロを目指してみたら？」

A「え？ 本当に？」

B「ああ、才能あるよ。彼にも見てもらったら。

A「えー！ 恥ずかしいよ。それは無理だよ。」

B「じゃあ、ネットに公開してみたら？ 沢山の人に見てもらえるよ。」

A「ほんと？」

B「ホンとホンと！ それに、どうせやるなら本気でプロ目指したら？ 彼の支えに少しでも成りたいんでしょ。」

本体の視点に切り替わり彼女は小説をアップロードした。

読者から感想が届いた。

(感想)

文章を書いてお金にするには無理があるような。普通の小学五年生

の作文程度ですね。誹謗中傷ではなくアドバイスですのでご理解を。つまりこのレベルで出版を目指してもむだ足になってしまいます。かまってもらいたいののは解ります。しかし、もう少し謙虚になりましょう。

心の世界の視点にて、Aが居る。感想主の言葉が空間に何度も響き渡る。次第にその声は怖いきもい声感想文を言葉にして空間に響き渡る。

過去の心の世界での嫌な出来事をフラッシュバックさせる。そしてパパが現れて、感想文を書き換え言う

(感想)

お前は怠け者だ。もっと努力して頑張れ。それから小説家なんて甘えた夢を見るな。お前は小説を書くという自己満足、つまりオナニしている様なものだ。そんな暇があるなら仕事しなさい。

ママも現れて同じことを言う。

A「パパ、ごめんなさい。ママ御免なさい」

Aは謝罪を連呼する。

しつかりして！

BはAを説得しようとするが、Aに声が届いてない。親の声でBの声は、さえぎられる

ママ「ごめんと思うなら自分を変えようよ。人に養って貰って恥ずかしくないの？ 私なら死ぬね！」

パパ「彼女の言うとおりだ。死んで世界から消える方が皆のためになる」

パパとママが死ねコールをする。
包丁をAに渡す

Aは涙を流しながら、手を包丁をあてがう。
でも、彼の思い出がフラッシュバック。死ねない。

パパ「死のうよ。彼はこの先の人生があるんだ。君以外のすばらしい女性と幸せになる権利があるんだ。

パパ、ママ「そつだそつだ！ しねー！ー！ー！ー！ー！！！！

パパ「わかつたよ。死ねないなら私が手を貸してやる。

パパは包丁を奪いさす。命乞いをするA。躊躇無くパパは刺す。
空間に彼女の悲鳴が木霊する。

<本体視点にて>
本体はリストカットをしている。きつた後、彼の優しい思いでフラッシュバック、我に返り、水道で血を洗い流す。
「ごめんね、ごめんね。」泣きながら呟く。彼の名を呟き、懺悔しながら……

トラウマが被害妄想か・・・（後書き）

<追加設定>

彼女の人生は女性として美しき女子高生時代の青春が無かった。それを演出する為に精神世界の容姿の成長は17才で止まる事とする。

そしてイメージアップの為に、あえて精神世界の主人公は顔を見える状態にする。

17歳のイメージキャラとしては以下な感じ

モザイクロール 動画URL

<http://www.youtube.com/watch?v>

||SYDQ69Mpo8U

小3年生の自殺未遂

彼女は学校に通い続けた、いつもと変わらない罵倒の日々。

彼女は周囲のざわめき、「デブブス」が聞こえる。

彼女今、闇のせかいに居て、心の中にもう一人の自分Aが居る

Aは泣いている。

そこにBが現れてAに言う

「腹が立つ！　なんで彼女が虐められるの？　なんで誰も彼女をかばってくれないの？　彼女は必要の無い人間なの。くやしいよ。だれか助けてあげて欲しい・・・でも、気のせいかもしれないよ。

さっき言った子、ノートを見ながらだったし・・・きっと勘違いだよ。被害妄想だから大丈夫だよ。しっかりして・・・

A「駄目だよ。だって私、本当にブスだもの。受け入れるしかないんだ。

Bは同情しAを優しく抱きしめる。

彼女本体の視点に戻る。

本体は変わらず孤立中

翌日、同じ事様にA Bは対話する

更に、翌日も同じ事を体験。

その絵は何度も繰り返し、彼女の制服の名札は1年生から3年生が変わっていた。

BがA慰める毎日だが、次第にBも疲れ果てて「一緒に死のうか」と言い出す

A「それは無理だよ。ママやパパが悲しむ」

B「じゃあ、確認してみようよ。もし、ママにも必要とされてないなら死ねるよ。」

A「ママに必要とされてない?? そんな事ないよ。ママは、ママは・・・」

B「じゃあさ、ごうしよう。死ぬと嘘ついて悲劇のヒロインを演じて学校休ませて貰うの。それなら、今の苦しみを死なずに楽になれるかもしれない」

その瞬間、現実世界の本人は、ロープを手にしていた。

そしてママに言う。

「ママ、私、死ぬね」

母親は言った

「死ぬなら死ぬば」

その声を聞いた瞬間、彼女に音が届かなくなり、世界が暗くフェードアウトし、もう一人の自分Aの視点に変わる。

Aは泣いている

それをBがな慰める

B「なんて、酷い親なの！！ 私が付いてる、一緒に死んで楽になろう。」

母親の視点に切り替わり、

「死ぬなら死ねば」「その代わり死んだらオヤツのプリン食べられないよ。・・・どうしたなにかあったの？ 言ってごらん。」

Aの視点に切り替わり

泣いて絶望するA。母親は、この世界では口パクしている様にみえる。でも、その姿を彼女は見ていない。

虐めの記憶がフラッシュバック。し母親の「死ねば」が脳内を駆け巡る。

次第にその光景は虐めの相手が「ブス、死ねよ！」と罵る光景へと変わり。

次第に、その光景は、虐める者達の顔を母親の顔に変え、ブス、死ねよ！が集団の「死ね！」コールに変わる

本体の視点に切り替わり

「死ぬなら死ねば」「その代わり死んだらオヤツのプリン食べられないよ。・・・どうしたなにかあったの？ 言ってごらん。」

彼女はロープをもったまま、母親の場を去る。

母親は彼女が去った後で、頭にクエスチョンマーク

「なに？　ただ、私の気を引きたかっただけなのね。ビックリした」

彼女は別のフロアで自殺しようとしてる。

試しにロープで首を絞めてみる

苦しい表情をする。

何度か試し、その場に疲れて蹲る

小3年生の自殺未遂（後書き）

感情的になると人の声は聞こえなく事があるかなと・・・

親の前で涙が流れなかったのは、親に優しくされる楽よりも、死んで楽になる事の方が、はるかに大きいと思えたからだ。

それだけ、親の愛が不足していた。というよりも親の愛を知らなかった。

パパが厳しくしようと方針を変えてしまった瞬間から、彼女は優しくされる事が無くなっていった。

期待をしても無意味だと思っよりなり、だからこそ、Bの精神は諦めて死ぬ事をAに促がせた。

Bの存在は客観的でドライ過ぎる自分の存在を示していて、Aの存在はBとは相対的でBには無い本体への自我を持っている。

BにとってAや本体は他人事であり、共感しているだけなのである。

そうやって本体はA、B 2つの存在でバランスを合わせている

友達が出来る

高校生となった彼女。

彼女には友達ができる。

相手の方から積極的に仲良く成りたいと申し出てきた。

彼女は嬉しい。

視点は変わり、心の中にて、

Aは泣きながらBに抱きつく。

A「凄くうれしいよ〜〜、ついに友達が出来たよ〜

B「良かったね。今まで良く虐めに耐えぬ抜いてきた。神様がきつと、ご褒美をくれたんだよ。

A「うん、神様に感謝しなくちゃw

B「これ、生まれて始めての友達なんじゃない？

A「そうだよ。ずっと憧れてた友達だよ。

Bも嬉し泣きをする。

AとBは、とても嬉しそう。でもちょっとスキンシップが凄すごい。

ガールズラブにすれば男子の視聴者は嬉しいだろうw宜しければ男バージョンを書くので、BL嗜好の視聴者もばっちりゲットするぜ！！
まあ、とりあえず、18禁にはならない。

でも、18禁バージョンがあっても良いと思う。

退屈な時間を無駄にオニー発散している人に見てもらえるなら、

書いた甲斐があるというものだ。欲を満たさせながら、偏見を取り除くなんて、凄く良いじゃない？

失う

彼女はある男子に視線を向けている。

視点切り替わり、心の視点Aが外の世界を見ている。

AはBに相談している。

A「あの人好きだよ・・・」

B「いい男だね」

A「でも、私に適わない恋・・・なんだよね・・・」

B「・・・」

本体の視点に切り替わり

彼女は友達とお喋りをしている。

「好きな人って居る？」友達は彼女に聞いた。

「・・・」

「居ないの？」

「居るよ。」

「だれだれ？」

「えー、恥ずかしいよ・・・」

「えーなんでー？」

「だって私不細工だから適わない恋だし・・・」

「そんな事ないよ。」

「え？」

「髪型変えたり、化粧したらいけるって」

「そうかなー」

「ほんとだよ。」

「えーー」

「だからさ、教えてみ、ほら、好きな人の名をつぶやいてみw つ
いったたら？」

「なにその、ついたらって？」

「世のトレンドだよ」

「いみふめい」

「ねえ、おしえてよ」

「しつこいなあ、もう、判ったよ。 宮ちゃんだから教えるだから
ね。絶対に誰にも言っちゃ駄目だよ」

「判ってるって。」

「XXXXXXXXX君」

「なるほどね、はいはいはい、そういうのが好みですか・・・」

「もう、恥ずかしいから、そういう納得やめてよ」

「よし、応援するよ。今度、上手く取り持ってあげる。」

「えええ、ちよつと・・・」

「合コンをセットするから、」

「えええ！！」

「大丈夫だよ。任せとけ！」

く友達がその彼に合コンをセッティングしようとするく

男「合コン？」

女「駄目かな？ 色んな子を連れて行くけど

男「……」

女「どうしたの？」

男「オレ、お前が好きなんだ。

女「え！？

男「だから、合コンとが出来ねえ

<友達と好きな人が付き合い始める>

彼女は、ある日の日曜日、2人のデート中のその光景を見る。

視点Aに変わり

立ち尽くしている。外の世界を呆然と見てる。

B「ちょっと、何でなの！？ どうして……？ 応援してくれる
って言ったのに、なんで？」

A「きつと、好きになっちゃんだよ。

B「そんな、理不尽な。

A「だって、あの人、凄く素敵だし、好きになってもおかしくない
よ。

B「それじゃあ、アンタの立場はどうなんのさ、

A「いいの。どっちにせよ、適わぬ恋だし、2人が幸せならそれで
いい。

B「それでいいって・・・あんた泣いてるじゃん。

A「あはははは、

B「糞が！

BはAを抱きしめる

視点本体は、それからというものの気を使い始めて、友達と付き合えなくなる。

友達も負い目を感じる様に彼女の元を離れていく。

積極的誘われていたが、次第に話しかけられなくなる、去られる。

その都度、彼女の脳裏に、2人のデートのが思い浮かぶ

その都度、泣いてるAをBが介抱する。

その精神世界で、彼女が教室にて孤立している状況をBが見ている。彼女の暗い顔をよそに、幸せそうな笑顔が周囲に存在する。

Bの一人ごと(なんだよこれ・・・、なんだよこの人として違う世界は、この子は今、完全に孤独してるじゃないか・・・友達が居なくて寂しい思いをしているのに・・・、なんだよこの境遇の違いは・・・、ふざけるな！この子が何をしたって言うんだ！なんでこの子の気持ちに誰も気付いてやれないんだ???可愛そうな貴方・・・、ねえ、どうして、貴方は友達を作らないの?どうして自分からは、あの輪に入っていないの?)

BがAに同情し共感したその時、

Aの感情がダイレクトにBの中に流れ込んで来た。

Bの中に彼女が虐めを受けている過去の光景、そして母親に死ねと言われた光景が飛び込む。

更に、精神世界で体験した集団の母親がブス死ねと罵る光景がBに入り込む。

更に、失恋の光景も流れ込む

Bは涙を流していた。

Aの我にBが飲み込まれる。

Bの一人事「そうか・・・そういう事か・・・誰にも必要とされなさ過ぎて、人に期待をするのを止めてしまったのか・・・、友達を得ても、何かの拍子に失うのが怖いのか・・・失うくらいなら、初めから友達など求めない方が楽なんだな・・・、くやしい。私では、この子の心を救えやしない。どうしたらいい？ どうしたら、この子は幸せになってくれる？

Bは、Aが見せた笑顔を思い出す

その後、暗い闇の天井を見据えながら抱きしめたAを胸に思う。

B（どうしたら、この子を笑顔にする事ができる?? 神様、おしえてくれ・・・

夢と希望を失う

彼女は高校を卒業後、大学生生となり都会に上京する。
夢は声優になる事

彼女にとつての楽しみは、一人での遊びだった。
物語が好きだった。自然に映像の役者さんに憧れた。
声優なら顔が関係なくても成れると信じていた。

AとBが苦しい人生の中で一緒に見つけた唯一の希望である。

大学を卒業するまでの間、彼女は、声優の夢を支えに生きた

そんな日々の中で彼女は携帯電話を手にいづれる

世は出会い系ブームの真っ只中。

「ハトさん、てるてる坊主さん」等という出会い系を初めて扱ったドラマ作品が登場した時代で皆、出会いに嵌った。

それを見ていたBさんは・・・

B「これこそ神の恵みかもしれない。出会い系サイトに登録して、ネットだけでも友達を作らせよう。」

と、Aさんをそそのかし、親から貰った仕送りを携帯代に当てた

そしたら、もう、凄い沢山のムサイ男がやってきた。

でも、彼女はチャホヤされるのが初めてなもので、どんどんとのめり込んだ。

そして男の人と初めてお茶をした。しかし、カラオケルームで迫られて逃げ帰る。

その後、何度も色々な男の人に会い、愛を求めた。

その中にイケメンが居て、一目ぼれした。もうアタック！

そして付き合うのだが、彼は彼女をストーカーと認定しているから、浅い付き合いを求められた。言い換えるなら、付き合い振りみたいなものである。

「いそがしい」を理由に断り、実家の家業を継ぐとかで騙されて逃げられる。

しかし、その、浅い付き合いの時間に彼女は焦った。

どうしても彼の気が引きたかった。

そこで、別の男と付き合い気を引こうとした。すると、ストーカーに遭遇。

出会ってみると童貞野郎だった。

「かわいいねえ」としつこく迫られた。

京都から広島の間をその童貞妖精さんは、行ったり来たり往復した。

仕事を止めてニートだった妖精は退屈だったのである。

彼氏が居ると言っているのにも関わらず迫るといふ、この情熱さは男として見習うべきかと思う気がしないでもなくもないかもしれないと思う。

妖精さんはXXXXXを彼女の住まいに投函したり、「彼女はオレと

付き合っているんだ！」と彼女のネット上の友達に噂を流したりして、彼女に愛を確かめた。

なぜ、そうなる？

ぜんぜん判らん。

きっと妖精さんは彼女にゾッコンしてしまう何かを感じたのだろうが、なんだろうか？

ネット上で顔も見えないのだから、声と文章のみだろうけれど、何か彼のツボに嵌った。

恐らくBさんの戦略により知らない内に男のダイナモに火を付けた。策士策に溺れるという感じだ。

それにしても男にとって彼女の何がツボになったのか、童貞以外の要因で読者さん教えてください

m () m

夢と希望を失う（後書き）

読者さんも夢と希望を打ち碎かれた気がする。

絶望幸福絶望幸福絶望・・・

前回のストーカーさんが生み出された理由は、運命を感じちゃったって事にしよう。そして運命とはなんぞ？という問題に関しては

『自分を認めてくれる人は世界でその人だけ』

とか思ったりする孤独？な心境ならば、人は壊れるかもしれないという事にする。

で、結局ストカー男は「おまえに使ったお金を返せ」と言い出し、今までの交通費等やら携帯代やら慰謝料で100万円を要求した。超、こええええ！

ストカー男は自ら警察に電話し、「女に騙されて金を取られた！」と言った。

どちらの言い分が正しいかどうかなんて関係ない。

彼女がお金を奪ってないという証拠は何処にも無い訳で、警察は取り調べを行う為に彼女の自宅へと電話、任意で聴取する為に出頭を命じた。

怖くなった彼女は親に電話してすがりつくついたら、「警察沙汰は貞操が悪い」と、言っではないが、そんな感じで問題を金で解決した。

そのストーカーは後にネット上で別の女をストーカーしている事が、その後の調査で明らかになる。

そしてストーカー男は逮捕された。

ストーカー男の真の正体は詐欺師であり、警察の電話も男の自作自演だったのだ。

家柄の良さそうな女を狙い犯行を繰り返していて、彼女は犠牲者の

内の一人であったのだ。そして、その事にニュースになったのだが彼女は気付く事は無かった。

なぜなら、ネットの出会いに嵌ってしまったからであり、ニュースなんぞ見る時間も出会いに割り当てたからである。

そして運命の男と出会いを果たす。

男の名はチン一郎、彼とは京都の一休寺で待ち合わせをした。

短足で丸刈りのポーズ。銀縁めがね、オタクが被る帽子、オタクが着るシャツ、オタクが履くジーンズ、靴は小学生指定の先端が青のシューズ。

キモイし絶対、貞男だと思ったし私は即効でバッグギアにシフトチェンジして帰ろうかなと彼女は考えた。

けれど彼女は気持ち悪くてゲロ吐いてしまって、その場から動けなくなった。

そしたら丸刈り男は優しく背中をさすり、彼女の汚いゲロを見ても平気そうに掃除し、体を案ずるのでした。

これにはもう、彼女はカルチャーショック！ ぞっこんラブした。

けれどプラトニックである彼女とプラトニックである童貞妖精は、どこかぎこちない。

長い時間をかけて少しずつ親密になっていった。

そして無事大学を卒業し仕事も見つけた。

工場でする仕事であるが素晴らしい仕事内容であった。

いきなり栃木に飛ばされて研修二日目で会社事情により仕事があるまで待機。

仕事をしなくていい仕事内容だったのだ。

そしてまた会社事情により京都に移動。

3人の同僚と寮での暮らしをする事になった。

この3人の同僚は神様を崇拝する人達で、いつも天からパワーを吸収して生きていた。

流石の異常事態に友達に成れそうだと悟った彼女は一緒に天からパワーを吸収したのだった。

そのパワーのお陰か、彼女はバリバリ仕事を頑張った。

頑張って頑張って会社にボロ雑巾の様にコキ使われた。

中には頑張りすぎて死んだ者もいた。

流石に労働基準法反している為に会社はその損害責任を追及された。

ここまでは良かったのだが、大きな問題があった。

実は天からのパワーは副作用があったのである。

副作用でノイローゼになり、いつのまにか仕事が出来ない体になっていたのだ。

止む無く一時しのぎで借金して食いつないたら、彼氏が「借金は危ないから止めよう」「お金に困ってるなら一緒に暮らそう」と言う事になり同棲をする事になった。

流石は妖精さん、ここぞとばかりにチャンスを狙ったのである。

彼女に平和が訪れたかと思いきや、問題が一つ残っていた。

彼女は声優になるという夢があったのである。わすれてたー
彼女も忘れてたー

そしたら幸運な事に家族が夢を応援してくれると言うじゃありませんか！

専門学校の代金も全て立て替えてくれる。

やりました。彼女は一度に沢山の幸せを手に入れた。

早速、彼女は声優養成スクールへと入学した。

やりたい事も叶ったし、彼氏ともラブラブで人生最高の幸せが訪れた

しかし、騙された。

専門学校卒業後、養成所へと所属するのだが入所金やレッスン費用が滅茶苦茶高いのである。

仕事して稼ごうにも、既に神のからのパワー吸収で副作用があった彼女にとって、仕事はきついものだった。

声優は楽しいからこそ感覚がマヒして活動できたが、仕事なんてツマラン事したら、一気に体調が崩れた。高熱を出し、耳が難聴になり、耳が聞こえなくなり夢が奪われる恐怖から仕事をやめた。養成所へのお金も払えないから、止めるしかなかった。

彼女は絶望した。夢が立ち消えて絶望した。働けずに彼氏のお荷物になるしかない自分には絶望した。

でも、あきらめない。

愛する彼の為に何かで役に立ちたい。

だから、あがいた。

でも、何一つ、この状況を離脱する方法が見つからない。

日々、離脱する事ばかりに気を取られ、遊ぶ事もしなくなり、好きだった映画も見なくなつた。

自責の念にかられ、彼の顔を見るとゲロを吐いた。

彼を見るたび、愛してると思ってた母親に「死ね」と言われた事を思い出した。

誰にも必要されない事への孤独と絶望を思い出し恐怖した。

必要とされる人間に成らなければ、あの時の二の舞なってしまうと感じた彼女は、愛する母と同じく愛する彼を同じものへと重ねた。彼の存在は彼女に無言で無意識のプレッシャーを与えさせ、彼女を頑張らせた。

だが。働けないのに何を頑張るといっただろうか。

彼女は、ただただ自責の念ばかりが彼女を支配する。

それに耐えかねて自殺を考える様になるのだが、人は簡単には死ねない。

小3の時にそれは経験済みだ。いざ、死のうと思っても死ねないのだ。

そんな感じの明らかに疲労困憊の彼女を見かねて、彼はメンタルクリニックへと連れて行った。

そこで診断されたのが「統合失調症」

ここから彼女の本当の絶望人生が始まるのである……

Bの居ない世界

自責の念の果てに、客観的で優しいBの存在はAに飲み込まれた。Aに同情し付き合えずにBは疲れ果てて死んだ。Bは、もういない。けれど、Bは登場する。Aの感情をただ、後押しするだけの為に・・・

彼女は家事をする。

けれど、手がかからない。

時間が刻々と流れる。

彼の優しいを思い出す。過去の優しい思い出がフラッシュバック。

暗い部屋に、心の自分Aが居る。

Aは、「家事をしなきゃ」と連呼して自分に言い聞かせる。

B「そうだね。必要とされなきゃ死ねと言われちゃうよ。

Aに思い出が蘇る。母親が「死ねば」と言ったとき体験光景をフラッシュバック。

虐める人と親の顔が同調して、死ねコールに変わる。

それに涙すA。

耳を塞ぐA

思わずBの名を呼んでいる。

でも、Bは現れない。

Bの対応思い出す。抱きしめてくれた事を思い出す。優しい映像を

思い出す。

Bがかばってくれたのに、今ではBは居ない。

Bを探して周囲をウロウロする。Bの名を叫んでも応答は無い。不安に苛まれる。Aは当てもなく走り続ける。

A「なんで？ どうして？

それだけを連呼する。

視点本体で、家事をしようと台所で止まっている本体。

視点、Aにて正常なAに戻っている。外の世界の冷蔵庫開けてその中を見ている。

A「こんな簡単なことさえできないなんて、あの人に申し訳なさ過ぎる。がんばるんだ。がんばるだ！！」

そこへ心の自分Bが登場。

「へー頑張りな。でも、お前、なんだかんだで、結局、なんもしてないよな。頑張るのはやっぱり口だけなんだな。」

A「そんな事ない。彼は私には勿体無い人、ここでつなぎ止めなきや、私の幸せが逃げてしまう。貴方は引っ込んでて！！」

B「大丈夫だよ。あんな良い奴いないよ。ちょっとくらい羽目はずして、オレと遊ぼうぜ」

A「駄目だよ。それじゃあ、何で私が存在してるか判らない」

Aが言った言葉が空間を反響させる

Bが少し前に言った言葉を思い出す。

少し前の言葉「そうだね。必要とされなきゃ死ぬと言われちゃう

よ。

Aに思い出が蘇る。母親が「死ねば」と言ったとき体験光景をフラッシュバック。
虐める人と親の顔が同調して、死ねコールに変わる。

それに涙するA。

耳を塞ぐA

思わずBの名を呼んでいる。

でも、Bは現れない。

Bの対応思い出す。抱きしめてくれた事を思い出す。優しい映像を思い出す。

Bがかばってくれたのに、今ではBは居ない。

Bを探して周囲をウロウロする。Bの名を叫んでも応答は無い。
不安に苛まれる。Aは当てもなく走り続ける。

A「なんで？ どうして？

それだけを連呼する。

視点本体で、家事をしようと台所で止まっている本体の彼女。

ここまで展開が重複するが、この先も同じようにループしてしまう映像的にループを無限に流し、ループ速度が加速して、画面が白くなる。

白くなりしばらくたつと、AとBが白い世界に立っている。

A「このループ地獄から抜け出せないのはアンタせいだ！

B「は？ 何いってんの？ アンタが弱いからだろう

A「お前が私に語りかけなければ問題は解決するんだ。

B「え、なに・・・ちよつと待ってよ。
怯えるB

Aは包丁をBに突き刺していた。

Bのが分解させてチリになっていく、Bが余りの痛みで絶叫する。

気付くとAにも包丁が刺さっている。

A「何で、どうして・・・

分解途中のBは言う。

「お前と私は一心同体だ。私を殺すならお前だって死ぬんだ！」

Aもチリになっていく。

痛みでA絶叫していく。

空間に2人の絶叫が木霊する。

視点は現実世界へと戻り。キッチンから。

野菜が果物、肉が冷蔵庫から出され、テーブルに置かれている。

水道の蛇口が流される音。

その脇に足がある。

体がある。

彼女である。

手首から血を流して放心状態の彼女居る。

まるで放置された自転車の様に居る。

時計の秒針を刻む音だけが部屋に流れていて、静寂が包んでいる。

統合失調症

彼女は完全に生きる意味を見失っていた、

頑張らなければならぬと自分に言い聞かせる度、ループ地獄からリストカットしてしまう。病院にて完全に生気の抜けた彼女の姿がある。

「統合失調症は一般的に完治する病ではありません。ですが、ある程度は症状を和らげる事が可能です。長い時間を要しますし大変だとも思いますが、気長に対処していきましょう。」

彼「具体的には

「周囲の理解が必要です。家族や友人に素直に打ち明け理解される事が、最善だと感じます」

彼女は家族との思い出を振り返る。
楽しかった良い思い出を振り返る。

<自宅前にて>

彼女は実家に帰った。

玄関のチャイムを鳴らし、家入る

居間にて

元気の無い彼女に向かって笑顔で言う。

パパ「精神病なんてセックスしてればならないんだよ。彼氏とはしてるのか？」

彼女は「精神病なんて」という言葉を反響する。

心の闇の世界でBはAに言う

「あちゃー。軽んじたよ。なんてだってー。簡単に言ってくれるね。所詮は他人事ってことか。なーAちゃん

A「……

Aは倒れて動けない

ママ心配そうに言う「一体、どうして、なんで帰ってきたの」

心の闇の世界でBはAに言う

「どうして？ どうして聞くの？ 別れよ。いちいち、説明させんのかよ。そんな気力さえ無いよね。ねーAちゃん

A「……

Aは倒れて動けない

弟「どうせ演技でしょ。甘えてるんだよ。」

B「最悪だ！ 甘えだって?? ふざけんな！ Aがどれだけ努力して身を滅ぼしたか知らない癖に！！ 見下すんじゃない！！

A「……こいつらやつぱ居駄目だ。危機感が何も無いや。明日死ぬかもしれないAなのに、全然わかってない。というよりも、Aが必要ないだよな。きつとそうだ。むかつくよね。そうだ！ Aちゃん、死んでみようよ昔みたいにな事しようよ。そうれば、こいつらも判るはずだ。死んでも失敗して死ねなくても楽になる。」

小3の時の自殺を決断する光景が浮かぶ、その直後、リストカットを既に終えている場面になる。

彼女視点で傷口を見つめる。

Aは苦悩の表情で血だまりの上に居る。出血が激しく動けない。
「痛いよ……、やっぱり死ぬの怖いよ。誰か助けて……」

Xが現れAの体に手を当て止血をしようとする。

X「死ぬな。こんな事で死ぬんじゃない！ 私の分まで生きてくれ
！」

A「あなたは誰？ なんだか懐かしい気分……ありがとう……」

本体は部屋に居た。手首のあとを見ている。

父親が部屋をノック。手首をあわてて長袖で隠そうとする。

B「あら、あら、病気を理解してもらっただけじゃなかったの？ 痛い
ねー！ この語に及んで心配掛けたくないとか？ そんなにAは良
い人だっけか？」

Aは倒れたまま動かない。

父「ちよつといいか？」

娘「うん

療養するただけに実家には置いておけない。

うん

実家にいるなら朝起きて運動してアルバイトしながら弁護士や医者など自立できて高収入の仕事を目指してもらおう。

うん

わかったか？

うん

父は帰っていく

娘「・・・・・・・・」

居間にてボーとしている彼女に

『経営者になるため』を本を渡す母。

「これで読むといいわ。」

<父と母の会話>

ママ「あの子元気が無いわね・・・やっぱり、声優に成れなかったのが・・・」

パパ「そうだろうな。声優業界も競争が激しい事だろうし、そう簡単に上手くは行かないさ。」

ママ「どうたらいいのかしら」

パパ「生きがいや目標があれば・・・」

ママ「・・・」

パパ自室にて考える

パパ（とりあえず何かをやらせてみて、それで、その仕事の楽しさを知らせるのはどうだろうか？ どんな仕事も辛いものだから成れていき、そこから楽しみを知っていくものだからな。よし、ここは心を鬼にして嫌われるのを覚悟で強く言ってみるか・・・）

ママ事実にて考える

ママ（世の中を勉強すれば、また別の考え方が広がるでしょう）

ママは「経営者になるため」を手取る。

B「ああああああああああ、やっちゃったー！ー！ー！
生きる気力を失ったAちゃんにそりゃないだろう。死にたいのだよ。直ぐにでも消えたいのだよ。何かをやるうなんて気分になる訳がないだろう。ほんとも判ってないな〜〜Aちゃん全然理解されてない。あれ？ Aちゃん私の声、聞こえてる？ あれ？

Aは、全ての過去を振り返っていた。

「療養するためだけに実家には置いておけない。実家にいるなら朝起きて運動してアルバイトしながら弁護士や医者など自立できて高収入の仕事を目指してもらおう」

「経営者になるため」を渡される。

この言葉を反響し、この絵を反復し、今までの人生での全てのプレシャーに属する記憶をフラッシュバックし、その中にはループするものもある。

画面が白くそまり、AとBが居る。

Aは動けない。Bはそれを悔しそうに眺めている。

Aは分解される。Bはそれを涙しながら眺めている。

世界にBが一人だけ残った。

静寂が包み込む。

泣き崩れているB

やがて、Bは憎悪した。Aの名を叫び続け憎悪を吐き出す

「許さない」この言葉を連呼している。

エネルギーの渦が発生している。

（さみしい。こんなにも一人が寂しいものだとは知らなかった・・・

心の中で思いながら、憎悪を吐き出す。

家族の顔を思い浮かべて許さないを連呼する。

そして家から本体彼女は出る。

「私、やっぱり戻って彼とクラス。ばいばい。」

両親達は？する

統合失調症（後書き）

優しいXの正体は実はB。死の淵に立たされたAを見て悪Bから善が這い出てきた。

今回のBも同じでAが死んでしまって、悲しくて出てきた。

変わらない関係

彼のアパートにて、キッチンの蛇口にて水滴が落ちる。寂しい雰囲気

Bが前回、憎悪をしている姿を見ている視点になる。

視点切り替わり、Aが物思いにふけている。どうやらBが壊れた姿を思い出していた様子

Aが隣を見ると、Bがスヤスヤの寝息を立てて寝てる。

Aは、自分の為に苦しんでいたBを思う。自分の為に尽くしてくれたB、そして意地悪したB、でも、死にかけたとき、止血して助けてくれたB、分解されてく最中の苦悩のB、自分が消えた後の憎悪の表情。それらすべてを感じ、まるで愛する人を思う目でBを見る。

Bの頬を撫で、寄り添う様に、寝ているBを、ゆっくりと抱きしめる。

ありがとと呟くが、視聴者には声が小さくて口パクで聞こえない。

本体の視点に切り替わり、彼女と彼が一緒のベッドに居る。

朝、彼は寝ている彼女に優しくキスをした後、仕事に出かけていく為に動き出す。

彼女は起きる。

彼「大丈夫、君は寝てて、実家から帰ってきてまだ疲れているだろう。」

彼女は彼を見ている。

彼は私宅を整えたあと部屋を出る、

それを最後まで見る。

部屋に一人になった彼女は長い沈黙に耐える。

時計の秒針音が空しく部屋に響き渡る。

テレビの電源を付けてみるが、リモコンを常に握りチャンネルを変えていて、見ているとは言えない。

窓から外の世界を眺め、車や人の行きかを見つめる。

時計はドンドン進む。 12時、13時、14、15・16、17、
18、19

火が暮れ、闇が少しずつ訪れる。

もう直ぐ、彼の帰ってくる時間が迫る。

部屋に静寂、誰も存在しない様子。

キッチンに蛇口から、ポタポタと水滴が流れ落ちる。

野菜が果物、肉が冷蔵庫から出され、テーブルに置かれている

その脇に足がある。

体がある。

彼女である。

手首から血を流して放心状態の彼女居る。

まるで放置された自転車の様に居る。

時計の秒針を刻む音だけが部屋に流れていて、静寂が包んでいる。

<彼が帰ってくる>

彼は仕事から帰る際に何が食べたいか携帯で連絡を入れる。

携帯に彼女は出ない。

胸騒ぎを覚えた彼は走りだす。

玄関を扉を開けると彼は愕然とした。

ぐったりとした彼女が横たわっている。

彼は絶望に打ちひしがれた表情で彼女の元に歩み寄り、抱きしめ泣いた。

彼女の名を叫びながら・・・

< 病院にて >

彼女は輸血を受けている。

彼は彼女の片手を握り寄り添い涙を流す。

彼女は握られた手をもつ片方の手で握り返す。

彼は笑顔で涙を流す。

時計の針は11時を回っている

秒針音は2人の泣き声でかき消される。

家族会

家族会という精神障害に関わる病を持つ者達の集まりに2人は参加している。

縦長の一つ繋がりテーブルにお茶菓子が並べられ、20人程の人が居る。

司会者の話を聞いている。

司会者の話「皆さん、家族会に入った今日は新しいメンバーを紹介します。

司会者は手を2人に差し伸べる。

彼が彼女を連れそう様に皆さんの前に出て行く。

彼は思い出していた。

<セラピストの話を思い出す>

家族会のパンフレットを彼に渡す医師
受け取る彼

「これは？」

「家族会パンフレットです。ここにはくさんと同じ悩みを持ち、精神病を持った人たちが集まっています。皆さんが互いに協力しあって助け合い励ましあいながら、この現代の難病と戦っています・・・
・申し訳ない

「なぜ誤るのですか？」

ここまでの段階まで来てしまうと、私自身もどう対処して良いのか判らないのです。人任せにするのだからセラピストとして情けないです。

「先生何を言ってるんですか、同じ事で悩む人たちが居て私たちがたいに諦めずに病と闘っていると思えるなら、とても心強いです。」

「・・・」

「先生がそのようだと患者さんが不安になりますよw」

先生は苦笑いを浮かべる。セラピストも心救われる事に少し驚いた。

彼と彼女は病室に後になると、先生はカルテを開いて見てる。

「どうしたんですか先生？」

「え？ あいや、ちょっと考え事をね」

「次の患者さん来てるんですから、早くしてください」

先生はカルテをカバンの中に入れて、次の診察を始めた。

<彼のアパートにて>

時計は7時を指し示めず。秒針は聞こえない。

彼と彼女が楽しく夕食をしている。

鍋を食べている。

何を話しているか視聴者には聞き取れないが、彼の笑顔が幸福を示していた。

彼と彼女の橋は進む

テレビのお笑い番組みて、2人の笑い声が聞こえる

時計は7時を指し示めす。秒針は聞こえない。

あとがき

ここから2話に戻ってくれ

怒り爆発と後悔

Aがパパとママに同時に刺される
悲鳴を上げながら分解が始まる。

Bは憎悪し泣き叫ぶ。大切な人失う様にAの名を叫ぶ。

Bはパパへへつかみ掛る。
をボコボコに殴る。

馬乗りになり血が飛び散っても殴りつ続ける。

その光景見た、ママは恐怖して逃げる。

Bは逃げるママを気付き、包丁を投げて脳天を突き抜けさす。

空間に血だらけの惨劇が残る。

本体の映像に切り替わり、
本体はパソコンの画面を凝視している。。

以下の感想文を読みながら復唱してる。

文章を書いてお金にするには無理があるような。普通の小学五年生の作文程度ですね。誹謗中傷ではなくアドバイスですのでご理解を。つまりこのレベルで出版を目指してもむだ足になってしまいます。かまってもらいたいののは解ります。しかし、もう少し謙虚になりましょう。

彼女の復唱する声は小さな声か次第に大きくなり怒り爆発させ、大きな声になる。

アパートにその奇声が響き渡る。

キーをカタカタと打っている

「ふざけるな！」この言葉を復唱する。

彼女の復唱する声は小さな声か次第に大きくなり怒り爆発させ、大きな声になる。

アパートにその奇声が響き渡る。

時間は飛び

部屋が静寂につつまこまれる

その状態から一声、ため息を吐く音が聞こえる。

彼女は鏡を見ている。口元をモゴモゴと動かしている。

口元に涙が落ちる

台所で包丁を取りリストカットをする。

その場に蹲り動かなくなる。

血が流れる

静寂、時計の針の秒針が成る音がしばらくして、彼女にもそれが聞こえてくる

彼女は自分の手首を確認した後

彼の優しい思いでフラッシュバック、我に返り、水道で血を洗い流す。

「ごめんね、ごめんね。」泣きながら呟く。彼の名を呟き、懺悔しながら……

作者の宣言文

彼と彼女は今だに救われたとは言えない。

彼女は何時も彼に申し訳なさを感じ、悔しい思いで生きている。

その苦痛を少しで和らげられるものが彼女にとって小説であった。

書いてると夢中になり精神病の呪縛から一時的に開放された。

売れる為の小説を真剣に書いていたから夢中であった。

しかし、読者の誠意ある感想文により、彼女の意識は執筆から外れて自責の念へと向かった。

そして小説という物を書く楽しさを忘れて書く事がつまらなくなつた。

やらなければ成らない。売れるものを書かなければならない。

彼女を追い込む状況は以前と何一つ変わらない。

そして追い込めば追い込むほど物書きとして書くという楽しさを体験できなくなる。

彼女がリラックスして書ける自分らしさのペースを完全に崩されてしまった。

感想投稿した者の感覚と受け取る感覚の価値観の違いが余りに大きすぎる。

まさか死のうとするなど感想を投稿した者は思いもしなかつただろう。

しかし、これが精神病の現実である。

知らない所で読者は人を殺してしまうかもしれないのだ。

そこにどんな善意を込めていようが、伝わらなければ意味が無い。

ましてや反対の方向に作用してしまうなら、読者にとっても後悔に

しかならない。

その読者が自分の過ちに気付かずに運よく生きてきたなら幸せ者である。人に善意を働き満足して、夜スヤスヤと眠れるからだ。それはいい事だ。その方がオレは良いと思う。

でも、それを許すのは今回限りだ！

オレが世界を変える！

オレがみんなの感情のスレ違いの機会を全部奪う！！

書いて書いて書くまくり、人に読ませて読ませまくる！！
それを続けて理想郷を作る！

そんで神様って皆に崇められてチヤホヤされたい！

『シー様を称える会』を誰か作って欲しい

そしてハーレムも作りたい。

「俺のハーレム集合っ！！」って叫びたい。

作者の宣言文（後書き）

『俺のハーレム集合っ!!』は、こちらからどうぞ
<http://ncode.syosetu.com/n8427>
i /

あとがき

物語は実話と比べて大きく脚色しました。

しかし、人の人生の過去や過程が何であれ、今のその状態がその人の全てを表している。過去はあくまで過去。

結果が今にあるだけだから、その過程が、どんなにメルヘンチックな話だったとしても実在する世の中の被害者の今の心理状態が再現されていればOK

この物語は、あくまで精神病患者へのイメージをアップさせるのが目的であり、偏見を取り除く為のものであり、実話か否かは価値の無い事。

社会的に弾圧を受けてる者への救済措置に物語が真実か否かは問題にしてはならない。だが、この物語は実話であるとした方が救済措置として都合が良い。

結論

冷静になって考えると、この話を実話だと言って統合失調症の人の苦悩を描写するだけでは全く説得力が無い。

同じ苦悩体験した者にしか理解できない筈だろうか、ここは無理やりにも嘘を混ぜる必要がある。

例えば「名誉大学教授が心理学者達と研究チームを立ち上げて患者のメンタルを徹底的に分析した」等という大きな凄みが無い限り、痛みを知らぬ者に自殺衝動に対する説得力を持たせる方法は無い。

一般人の大多数が痛みを知らない以上、それしか方法は無い。

だが、果たして権力者達が遙か足元に要る精神病の気持ち判るだろうか・・・挫折経験が無いのだからこそ、権力者達は出世する事が可能だったのだ。

痛みの判る偉い人のなんて本当に存在するのか？

少ないだろうから探すのは困難を極めると思う。だれか探すの一緒に協力してくれんかな？

結論（後書き）

結局、何をするのが最善かという点、精神病な人の自殺衝動の恐怖シーンを偉い人間のお墨付きで説得力を持って人に見せることである。

心理学者チームの研究結果により、そういう事実が嘘でも良いから発表されればいい。

もっと極論すると、偉い人が「世界一苦労しているが精神病の人間なので、いたわりなさい」とか言えばいいだけのこと。

つまりオバマ大統領が一言、発言すれば全て丸く収まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5003p/>

全人類は、これを読め！

2010年12月25日17時57分発行